

## Interview / 宇崎竜童

出演

2月20日(土)公開 **「痛くない死に方」**監督・脚本 / 高橋伴明 出演 / 柄本佑、宇崎竜童、奥田瑛二ほか  
配給 / 渋谷プロダクション

©「痛くない死に方」製作委員会

在宅医療のスペシャリスト長尾和宏のベストセラー「痛くない死に方」「痛い在宅医療」を映画化した「痛くない死に方」。劇中で、宇崎竜童は柄本佑演じる主人公の在宅医が担当する末期の肺がん患者役に扮している。

「演じてみて、改めて、僕も映画のように家で死ぬのがいいなって思いました。病気になった時に進歩した現代の医学の力を借りることもあるかもしれない。でも、頑固なこだわりなどではなく、そつういえば、昔はみんな、家で死んでたよな。そういう選び方をしていいんじゃないかな」と思っただけです。無理して命を延ばしてもらっても、ほとんど意識がないなら、肉体だけがある感じがする。できれば、ちゃん

と意識があつて、寿命で自然に家で死ぬるのがいいですよ」

映画で描かれるのは「死に方も選べるのではないか」。病院が、在宅か。痛みを伴いながら延命治療を続ける入院は本当に必要なのか。監督の高橋伴明は友人でもあり、82年の映画「TATTOO(刺青)あり」は宇崎が主演。

「伴明監督のもと、役者みたいなことをやらせていただく。そういうこと以上に二人の間には濃厚な人間関係があるので、仕事として引き受けるという感覚はあまり、ありませんでした。お互いの間には何か歴史のようなものが漂っているんです。この役を私にふってくれたことがまず面白いし、この年齢だと映画のテーマに自分の身を重なりもします。大いに感謝して撮影に臨みました。今回は特に役者をやったという気が全然していません。彼は僕の軽さ、いい加減さ、強さも弱さも全部、知り尽くしている。だから、まんまやればいいんだと安心してました」

原作者で医師の長尾和宏も医療監修で参加。

「唯一といつていい演技は僕の最期の場面ですね。長尾先生がこの患者はこういう症状でした、っていうのを熱心にやってみせてくれたので、その通りしてみたくんです。共演者やスタッフ、ものすごくたくさんの人たちに囲まれての臨終シーンは

なんだか自分の最期を疑似体験しているような気持ちになりました。ああ、自分もこんな風になりにぎしく送ってもらいたいな」と思いましたね。きつと、そういう季節に来てるんだなあ。 いい加減な役者をやってきましたが、記念すべき作品になりました」

作品を経て、自身の終活についても考えるようになったという。

「僕は、一人で生きることをしたことがないし、得意じゃないと思う。阿木燿子とはつい最近まで、できれば一緒に死にたいね」と話していたんです。もちろん心中とかではなく、コロッと二人でね。でも、いまは彼女から「先に死なないと約束してほしい」と言われています。できるかどうかわからないけど、なるべく彼女を看取って、きちんと仕切ってから、2、3日後に僕も逝かしてもらおうというのが自分にとっては一番、いい死に方。いまの時代、誰だっていつ死ぬかわからない。死に際については考えておいた方がいいです」

## Profile

宇崎竜童

京都府出身。1973年にダウン・タウン・ブギウギ・バンドでデビュー。作曲家として、妻で作詞家の阿木燿子とともに数多くの楽曲をヒットさせる。2019年、阿木と共に岩谷時子賞特別賞受賞。『駅-STATION』(81)、『社葬』(89)などで日本アカデミー賞優秀音楽賞受賞。映画『曾根崎心中』(1978年)、TATTOO<刺青>あり』(1982年)に主演。2020年、映画『罪の声』に出演。

取材・文 / 高山亜紀